足跡

石川啄木

冬の長い国のことで、物蔭にはまだ雪が残つて居り、村端（むらはづれ）の溝に芹（せり）の葉一片（ひとつ）青（あを）んではゐないが、晴れた空はそことなく霞んで、雪消（ゆきげ）の路の泥濘（ぬかるみ）の処々乾きかゝつた上を、春めいた風が薄ら温かく吹いてゐた。それは明治四十年四月一日のことであつた。

新学年始業式の日なので、S村尋常高等小学校の代用教員、千早健（ちはやたけし）は、平生より少し早目に出勤した。白墨（チヨオク）の粉に汚れた木綿の紋付に、裾の擦切れた長目の袴を穿いて、クリ〱した三分刈の頭に帽子も冠らず——渠（かれ）は帽子も有（も）つてゐなかつた。——亭乎（すらり）とした体を真直（まつすぐ）にして玄関から上つて行くと、早出の生徒は、

毎朝、控所の彼方此方（かなたこなた）から駆けて来て、敬（うやうや）しく渠を迎へる。中には態々（わざわざ）渠に叩頭（おじぎ）をする許（ばつか）りに、其処に待つてゐるのもあつた。その朝は殊に其数が多かつた。平生（へいぜい）の三倍も四倍も……遅刻勝（がち）な成績（でき）の悪い児の顔さへ其中に交つてゐた。健は直ぐ、其等の心々に溢れてゐる進級の喜悦（よろこび）を想うた。そして、何がなく心が曇つた。

渠はその朝解職願を懐にしてゐた。

職員室には、十人許（ばか）りの男女（をとこをんな）——何れも穢（きたな）い扮装（みなり）をした百姓達が、物に怖（おび）えた様にキヨロ〱してゐる尋常科の新入生を、一人づゝ伴れて来てゐた。職

員四人分の卓（つくゑ）や椅子、書類入の戸棚などを並べて、さらでだに狭くなつてゐる室は、其等の人数（にんず）に埋（うづ）められて、身動（みじろ）ぎも出来ぬ程である。これも今来た許りと見える女教師の並木孝子は、一人で其人数を引受けて少し周章（まごつ）いたといふ態（ふう）で、腰も掛けずに何やら急（いそ）がしく卓の上で帳簿を繰つてゐた。

　そして、健が入つて来たのを見ると、

『あ、先生！』

と言つて、ホツと安心した様な顔をした。

　百姓達は、床板に膝を突いて、交る〲先を争ふ様に健に挨拶した。

『老婆（おばあ）さん、いくら探しても、松三郎といふのは役場から来た学齢簿の写しにありませんよ。』と、孝子は心持眉を顰（ひそ）めて、古手拭を冠つた一人の老女（としより）に言つてゐる。

『ハア。』と老女は当惑した様に眼をしよぼつかせた。

『無い筈はないでせう。尤（もつと）も此辺（このへん）では、戸籍上の名と家（うち）で呼ぶ名と違ふのがありますよ。』と、健は喙（くち）を容れた。そして老女（としより）に、

『芋田（いもだ）の鍛冶屋だつたね、婆さんの家（うち）は？』

『ハイ。』

『いくら見てもありませんの。役場にも松三郎と届け

た筈だつて言ひますし……』と孝子はまた初めから帳簿を繰つて、『通知書を持つて来ないもんですから、薩張(さつぱり)分りませんの。』

『可怪(をかし)いなア。婆さん、役場から真箇(ほんと)に通知書が行つたのかい？　子供を学校に出せといふ書付が？』

『ハイ。来るにア来ましたども、弟の方のな許りで、此児(これ)（と顎で指して、）のなは今年ア来ませんでなす。

それでハア、持つて来(こ)なごあんさす。』

『今年は来ない？　何だ、それぢや其児は九歳(ここのつ)か、十歳(とを)かだな？』

『九歳(ここのつ)。』と、その松三郎が自分で答へた。膝に補布(つぎ)を

当てた股引を穿いて、ボロ〳〵の布の無尻（むじり）を何枚も〳〵着膨れた、見るから腕白らしい児であつた。

『九歳なら去年の学齢だ。無い筈ですよ、それは今年だけの名簿ですから。』

『去年ですか。私（わたし）は又、其点（そこ）に気が付かなかつたもんですから……』と、孝子は少しきまり悪気（わるげ）にして、其児の名を別の帳簿に書入れる。

『それぢや何だね、』と、健は再（また）老女の方を向いた。

『此児（これ）の弟といふのが、今年八歳（やつつ）になつたんだらう。』

『ハイ。』

『何故（なぜ）それは伴れて来ないんだ？』

『ハイ。』

『ハイぢやない。此児は去年から出さなけれアならないのを、今年まで延したんだらう。其麼風（そんなふう）ぢや不可（いけな）い、兄弟一緒に寄越すさ。遅く入学さして置いて、卒業もしないうちから、子守をさせるの何のつて下げて了ふ。其麼風（そんなふう）だから、此辺の者は徴兵に採られても、大抵上等兵にも成らずに帰つて来る。』

『ハイ。』

『親が悪いんだよ。』

『ハイ。そでごあんすども、先生様、兄弟何方（どっち）も一年生だら、可笑（をかし）ごあんすべアすか？』

と、老女は黒漿(おはぐろ)の落ちた歯を見せて、テレ隠しに追従(つゐしよう)笑ひをした。

『構うもんか。弟が内務大臣をして兄は田舎の郡長をしてゐた人さへある。一緒な位何でもないさ。』

『ハイ。』

『婆さんの理屈で行くと、兄が死ねば弟も死なゝけれアならなくなる。俺の姉は去年死んだけれども俺は恁(か)うして生きてゐる。然(さ)うだ。過日(こなひだ)死んだ馬喰(ばくらう)さんは、婆さんの同胞(きやうだい)だつていふぢやないか？』

『アツハヽヽ。』と、居並ぶ百姓達は皆笑つた。

『婆さんだつて其通りチヤンと生きてゐる。ハヽヽ。

兎に角弟の方も今年から寄越すさ。明日（あす）と明後日（あさって）は休みで、四日から授業が始まる。その時此児（これ）と一緒に。』

『ハイ。』

『真箇（ほんたう）だよ。寄越さなかつたら俺が迎ひに行くぞ。』

さう言ひながら立ち上つて、健は孝子の隣の卓に行つた。

『お手伝ひしませう。』

『済みませんけれども、それでは何卒（どうぞ）。』

『アもう八時になりますね。』と、渠（かれ）は孝子の頭の上に掛つてゐる時計を見上げた目を移して、障子一重で隔てた宿直室を、顎で指した。『まだ顔を出さないんで

すか？』

孝子は笑つて点頭(うなづ)いた。

その宿直室には、校長の安藤が家族――妻(さい)と二人の小供――と共に住んでゐる。朝飯(あさめし)の準備(したく)が今漸々(やうやう)出来たところと見えて、茶碗や皿を食卓(ちやぶだい)に並べる音が聞える。無精者(ぶしやうもの)の細君は何やら呟々(ぶつぶつ)小供を叱つてゐた。

新入生の一人々々を、学齢児童調書に突合して、健はそれを学籍簿に記入し、孝子は新しく出席簿を拵(こしら)へる。何本を買はねばならぬかとか、石盤は石石盤が可いか紙石盤が可いかとか、塗板(ぬりいた)も有(も)たせねばならぬかとか、父兄は一人々々同じ様な事を繰返して訊く。

孝子は一々それに答へる。すると今度は健の前に叩頭（おじぎ）をして、小供の平生（へいぜい）の行状やら癖やら、体の弱い事などを述べて、何分よろしくと頼む。新入生は後から〳〵と続いて狭い職員室に溢れた。

忠一といふ、今度尋常科の三年に進んだ校長の長男が、用もないのに怖々（おづおづ）しながら入つて来て、甘える様（やう）の姿態（しな）をして健の卓（つくゑ）に倚掛（よりかか）つた。

『彼方（あつち）へ行け、彼方へ。』

と、健は烈しい調子で、隣室にも聞える様に叱つた。

『ハ。』

と言つて、猾（ずる）さうな、臆病らしい眼付で健の顔を見な

がら、忠一は徐々と後退りに出て行つた。為様のない横着な児で、今迄健の受持の二年級であつたが、外の教師も生徒等も、校長の子といふのでそれとなく遠慮してゐる。健はそれを、人一倍厳しく叱る。五十分の授業の間を教室の隅に立たして置くなどは珍しくもない事で、三日に一度は、罰として放課後の教室の掃除当番を吩付ける。其麼時は、無精者の母親がよく健の前へ来て、抱いてゐる梅ちやんといふ児に胸を披けて大きい乳房を含ませながら、

『千早先生、家の忠一は今日も何か悪い事しあんしたべすか？』

などゝ言ふことがある。

『ハ。忠一さんは日増（ひまし）に悪くなる様ですね。今日も権太といふ小供が新らしく買つて来た墨を、自分の机の中に隠して知らない振してゐたんですよ。』

『コラ、彼方（あちら）へ行け。』と、校長は聞きかねて細君を叱る。

『それだつてなす、毎日悪い事許りして千早先生に御迷惑かける様なんだハンテ、よくお聞き申して置いて、後で私（わだし）もよツく吩付（いひつ）けて置くべと思つてす。』

健は平然（けろり）として卓隣（つくゑどな）りの秋野といふ老教師と話を始める。校長の妻は、まだ何か言ひたげにして、上吊（うはづ）

つた眉をピリ〳〵させながら其処に立つてゐる。然うしてるところへ、掃除が出来たと言つて、掃除監督の生徒が通知（しらせ）に来る。

『黒板も綺麗に拭いたか？』

『ハイ。』

『先生に見られても、少しも小言を言はれる点（ところ）が無い様に出来たか？』

『ハイ。』

『若し粗末だつたら、明日また為直（しなほ）させるぞ。』

『ハイ。立派に出来ました。』

『好し。』と言つて、健は莞爾（につこり）して見せる。『それでは

一同（みんな）帰しても可い。お前も帰れ。それからな、今先生が行くから忠一だけは教室に残つて居れと言へ。』
『ハイ。』と、生徒の方も嬉しさうに莞爾（にっこり）して、活潑に一礼して出て行く。健の恁麼（こんな）訓導方（しつけかた）は、尋常二年には余りに厳（きび）し過（すぎ）ると他の教師は思つてゐた。然しその為に健の受持の組は、他級の生徒から羨まれる程規律がよく、少し物の解つた高等科の生徒などは、何彼につけて尋常二年に笑はれぬ様にと心懸けてゐる程であつた。
軈（やが）て健は二階の教室に上つて行く。すると、校長の妻は密乎（こつそり）と其後を跟（つ）けて行つて、教室の外から我が子

の叱られてゐるのを立聞(たちぎき)する。意気地なしの校長は校長で、これも我が子の泣いてゐる顔を思ひ浮べながら、明日の教案を書く……

　健が殊更校長の子に厳しく当るのは、其児が人一倍悪戯(わるさ)に長(た)けて、横着で、時にはその生先(おひさき)が危まれる様な事まで為出(しで)かす為には違ひないが、一つは渠の性質に、其麼(そんな)事をして或る感情の満足を求めると言つた様な点(ところ)があるのと、又、然うする方が他の生徒を取締る上に都合の好い為でもあつた。渠が忠一(いち)を虐めることが厳しければ厳しい程、他の生徒は渠を偉い教師の様に思つた。

そして、女教師の孝子にも、健の其麼(そんな)行動(しうち)が何がなしに快く思はれた。時には孝子自身も、人のゐない処へ忠一を呼んで、手厳しく譴(たしな)めてやることがある。それは孝子にとつても或る満足であつた。

孝子は半年前(はんねんまへ)に此学校に転任して来てから、日一日と経つうちに、何処の学校にもない異様な現象を発見した。それは校長と健との妙な対照で、健は自分より四円も月給の安い一代用教員に過ぎないが、生徒の服してゐることから言へば、健が校長の様で、校長の安藤は女教師の自分よりも生徒に侮(あなど)られてゐた。孝子は師範女子部の寄宿舎を出てから二年とは経たず、一

生を教育に献げようとは思はぬまでも、授業にも読書にもまだ相応に興味を有(も)つてる頃ではあり、何処(どこ)か気性の確固(しっかり)した、判断力の勝つた女なので、日頃校長の無能が女ながらも歯痒(はがゆ)い位。殊にも、その妻のだらしの無いのが見るも厭で、毎日顔を合してゐながら、碌そつぽ口を利かぬことさへ珍しくない。そして孝子には、万事(よろづ)に生々とした健の烈しい気性――その気性の輝いてゐる、笑ふ時は十七八の少年の様に無邪気に、真摯(まじめ)な時は二十六七にも、もつと上にも見える渠の眼、(それを孝子は、写真版などで見た奈勃翁(ナポレオン)の眼に肖(に)たと思つてゐた。)――その眼が此学校の精神(たましひ)でゞもあ

るかの様に見えた。健の眼が右に動けば、何百の生徒の心が右に行く、健の眼が左に動けば、何百の生徒の心が左に行く、と孝子は信じてゐた。そして孝子自身の心も、何時しか健の眼に随つて動く様になつてゐる事は、気が付かずにゐた。

齢から言へば、孝子は二十三で、健の方が一歳(ひとつ)下の弟である。が、健は何かの事情で早く結婚したので、その頃もう小児(こども)も有つた。そして其家(そのうち)が時として其日の糧(かて)にも差支へる程貧しい事は、村中知らぬ者もなく、健自身も別段隠す態(ふう)も見せなかつた。或日、健は朝から浮かぬ顔をして、十分の休み毎に呟呻(あくび)許(ばか)りしてゐた。

『奈何(どう)なさいましたの、千早先生、今日はお顔色が良くないぢやありませんか？』

と孝子は何かの機会(ひやうし)に訊いた。健は出かゝつた生呿呻(なまあくび)を噛んで、

『何有(なあに)。』

と言つて笑つた。そして、

『今日は煙草が切れたもんですからね。』

孝子は何とも言ふことが出来なかつた。健が平生(へいぜい)人に魂消(たまげ)られる程の喫煙家で、職員室に入つて来ると、甚麽(どんな)事があらうと先づ煙管(キセル)を取上げる男であることは、孝子もよく知つてゐた。卓隣りの秋野は其煙草入を出

して健に薦(すす)めたが、渠は其日一日喫(の)まぬ積りだつたと見えて、煙管も持つて来てゐなかつた。そして、秋野の煙管を借りて、美味(うま)さうに二三服続け様に喫(の)んだ。孝子はそれを見てゐるのが、何がなしに辛かつた。宿へ帰つてからまで其事を思出して、何か都合の好い名儀をつけて、健に金を遣る途はあるまいかと考へた事があつた。又、去年の一夏、健が到頭古袷(ふるあはせ)を着て過した事、それで左程暑くも感じなかつたといふ事なども、渠(かれ)自身の口から聞いてゐたが、村の噂はそれだけではなかつた。其夏、毎晩夜遅くなると、健の家(うち)——或る百姓家を半分割(しき)つて借りてゐた——では障子を開放(あけはな)し

て、居たたまらぬ位杉の葉を燻（いぶ）しては、中で頻（しき）りに団扇で煽（あふ）いでゐた。それは多分蚊帳が無いので、然うして蚊を逐出してから寝たのだらうといふ事であつた。其麼（そんな）に苦しい生活をしてゐて、渠には些（ちつ）とも心を痛めてゐる態（ふう）がない。朝から晩まで、真（しん）に朝から晩まで、小供等を対手に怡々（いい）として暮らしてゐる。孝子が初めて此学校に来た秋の頃は、毎朝昧爽（よあけ）から朝飯時まで、自宅に近所の小供等を集めて「朝読（あさよみ）」といふのを遣つてゐた。朝な〳〵、黎明（しののめ）の光が漸く障子に仄（ほの）めいた許（ばか）りの頃、早く行くのを競つてゐる小供等――主に高等科の――が、戸外（そと）から声高に友達を呼起して行くのを、

孝子は毎朝の様にまだ臥床（とこ）の中で聞いたものだ。冬になつて朝読が出来なくなると、健は夜な〳〵九時頃までも生徒を集めて、算術、読方、綴方から歴史や地理、古来（むかしから）の偉人の伝記逸話、年上の少年には英語の初歩なども授けた。この二月村役場から話があつて、学校に壮丁教育の夜学を開いた時は、三週間の期間を十六日まで健が一人で教へた。そして終ひの五日間は、毎晩裾から吹上（ふきあげ）る夜寒を怺（こら）へて、二時間も三時間も教壇に立つた為に風邪を引いて寝たのだといふ事であつた。

それでゐて、健の月給は唯（たつた）八円であつた。そして、その八円は何時（いつ）でも前借（ぜんしやく）になつてゐて、二十一日の

月給日が来ても、いつの月でも健には、同僚と一緒に月給の渡されたことがない。四人分の受領書を持つて行つた校長が、役場から帰つて来ると、孝子は大抵紙幣（さつ）と銀貨を交（ま）ぜて十二円渡される。検定試験上りの秋野は十三円で、古い師範出の校長は十八円であつた。そして、校長は気毒相（きのどくさう）な顔をしながら、健には存在（ぞんざい）な字で書いた一枚の前借証を返してやる。渠は平然（けろり）としてそれを受取つて、クル〳〵と円めて火鉢に燻（く）べる。淡い焰がメラ〳〵と立つかと見ると、直ぐ消えて了ふ。と、渠は不揃な火箸を取つて、白くなつて小（ちひさ）く残つてゐる其灰を突（つつ）く。突いて、突いて、そして上げた顔は

平然(けろり)としてゐる。

孝子は気毒(きのどく)さに見ぬ振をしながらも、健のその態度(やうす)をそれとなく見てゐた。そして訳もなく胸が迫つて、泣きたくなることがあつた。其麼(そんな)時は、孝子は用もない帳簿などを弄(いぢく)つて、人後(ひとあと)まで残つた。月給を貰つた為に怡々(いそいそ)して早く帰るなどと、思はれたくなかつたのだ。

孝子の目に映つてゐる健は、月給八円の代用教員ではなかつた。孝子は或る時その同窓の女友達の一人へ遣つた手紙に、この若い教師のことを書いたことがある。若しや詰らぬ疑ひを起されてはといふ心配から、

健には妻子のあることを詳しく記した上で、
『私の学校は、この千早先生一人の学校といつても可(い)い位よ。奥様(おくさん)やお子様(こさん)のある人とは見えない程若い人ですが、男生でも女生でも千早先生の言ふことをきかぬ者は一人もありません。そら、小野田教諭がいつも言つたでせう——教育者には教育の精神を以て教へる人と、教育の形式で教へる人と、二種類ある。後者には何人でも成れぬことはないが、前者は百人に一人、千人に一人しか無いもので、学んで出来ることではない、謂はば生来(うまれつき)の教育者である——ツて。千早先生はその百人に一人しかない方の組よ。教授法なんかか

ら言つたら、先生は乱暴よ、随分乱暴よ。今の時間は生徒と睨(にら)めツクラをして、敗けた奴を立たせることにして遊びましたよなどゝ言ふ時があります。（遊びました）といふのは嘘で、先生は其麼事をして、生徒の心を散るのを御自分の一身に集(あつめ)るのです。さうしてから授業に取(とり)かゝるのです。偶(たま)に先生が欠勤でもすると、私が掛持で尋常二年に出ますの。生徒は決して私ばかりでなく、誰のいふことも、聞きません。先生の組の生徒は、先生のいふことでなければ聞きません。私は其麼時、「千早先生はさう騒いでも可(い)いと教へましたか？」と言ひます。すると、直ぐ静粛になつて了

ひます。先生は又、教案を作りません。その事で何日(いつ)だつたか、巡(まは)つて来た郡視学と二時間許り議論をしたのよ。その時の面白かつたこと？　結局視学の方が敗けて胡麻化(ごまくわ)して了つたの。

『先生は尋常二年の修身と体操を校長にやらして、その代り高等科（校長の受持）の綴方と歴史地理に出ます。今度は千早先生の時間だといふ時は、鐘が鳴つて控所に生徒の列んだ時、その高等科の生徒の顔色で分ります。

『尋常二年に由松といふ児があります。それは生来(うまれつき)の低脳者で、七歳(ななつ)になる時に燐寸(マッチ)を弄(もてあ)そんで、自分の

家（うち）に火をつけて、ドン〳〵燃え出すのを手を打つて喜んでゐたといふ児ですが、先生は御自分の一心で是非由松を普通（あたりまへ）の小供にすると言つて、暇さへあればその由松を膝の間に坐らせて、（先生は腰かけて、）上から昵（じつ）と見下しながら、肩に手をかけて色々なことを言つて聞かせてゐます。その時だけは由松も大人しくしてゐて、終ひには屹度（きつと）メソ〳〵泣出して了ひますの。時として先生は、然うしてゐて十分も二十分も黙つて由松の顔を見てゐることがあります。二三日前でした、由松は先生と然うしてゐて、突然眼を瞑（つぶ）つて背後（うしろ）に倒れました。先生は静かに由松を抱いて小使室へ行つて、

頭に水を掛けたので小供は蘇生しましたが、私共は一時喫驚しました。先生は、「私の精神と由松の精神と角力をとつて、私の方が勝つたのだ。」と言つて居られました。その由松は近頃では清書なんか人並に書く様になりました。算術だけはいくら骨を折つても駄目ださうです。

『秀子さん、そら、あの寄宿舎の談話室ね、彼処の壁にペスタロツヂが小供を教へてゐる画が掲けてあつたでせう。あのペスタロツヂは痩せて骨立つた老人でしたが、私、千早先生が由松に物を言つてるところを横から見てゐると、何といふことなくあの画を思出すこ

とがありますの。それは先生は、無論一生を教育事業に献げるお積りではなく、お家の事情で当分あゝして居られるのでせうが、私は恁麼(こんな)人を長く教育界に留めて置かぬのが、何より残念な事と思ひます。先生は何か人の知らぬ大きな事を考へて居られる様ですが、私共には分りません。然しそのお話を聴いてゐると、常々私共の行きたい〳〵と思つてる処――何処(どこ)ですか知りませんが――へ段々連れて行かれる様な気がします。そして先生は、自分は教育界獅子(しし)身中の虫だと言つて居られるの。又、今の社会を改造するには先づ小学教育を破壊しなければいけない、自分に若し二つ体

があつたら、一つでは一生代用教員をしてゐたいと言つてます。奈何(どう)して小学教育を破壊するかと訊くと、何有(なあに)ホンの少しの違ひです、人を生れた時の儘(まんま)で大きくならせる方針を取れや可いんですと答へられました。

『然し秀子さん、千早先生は私にはまだ一つの謎です。何処か分らないところがあります。ですけれども、毎日同じ学校にゐて、毎日先生の為さる事を見てゐると、どうしても敬服せずには居られませんの。先生は随分苦しい生活をして居られます。それはお気毒な程です。そして、先生の奥様(おくさん)といふ人は、矢張好い人で、優し

い、美しい（但し色は少し黒いけれど、）親切な方です。……』

と書いたものだ。実際それは孝子の思つてゐる通りで、この若い女教師から見ると、健が月末の出席歩合（ぶあひ）の調べを怠けるのさへ、コセ〳〵した他の教師共より偉い様に見えた。

が、流石は女心で、例へば健が郡視学などと揶揄（からかひ）半分に議論をする時とか、父の目の前で手厳しく忠一を叱る時などは、傍（はた）で見る目もハラ〳〵して、顔を挙げ得なかつた。

今も、健が声高に忠一を叱つたので、宿直室の話声

が礑(はた)と止んだ。孝子は耳敏くもそれを聞付けて忠一が後退(あとしざ)りに出て行くと、

『マア、先生は！』

と低声(こごゑ)に言つて、口を窄(すぼ)めて微笑みながら健の顔を見た。

『ハヽヽ。』と、渠は軽(かろ)く笑つた。そして、眼を円(まろ)くして直ぐ前に立つてゐる新入生の一人に、

『可(い)いか。お前も学校に入ると、不断先生の断りなしに入つては不可(いけな)いといふ処へ入れば、今の人の様に叱られるんだぞ。』

『ハ。』と言つて、其児はピヨコリと頭を下げた。火傷(やけど)

の痕の大きい禿が後頭部に光つた。

『忠一イ。忠一イ。』と、宿直室から校長の妻の呼ぶ声が洩れた。健と孝子は目と目で笑ひ合つた。

軈(やが)て、埃に染みた、黒の詰襟の洋服を着た校長の安藤が出て来て、健と代つて新入生を取扱かつた。健は自分の卓(つくゑ)に行つて、その受持の教務(しごと)にかゝつた。

　九時半頃、秋野教師が遅刻の弁疏(いひわけ)を為(し)い〳〵入つて来て、何時も其室(そこ)の柱に懸けて置く黒繻子の袴を穿いた時は、後から〳〵と来た新入生も大方来尽して、職員室の中は空(す)いてゐた。健は卓の上から延び上つて、其処に垂れて居る索(なは)を続様(つづけざま)に強く引いた。壁の彼方(かなた)

では勇しく号鐘（かね）が鳴り出す。今か〳〵とそれを待ちあぐんでゐた生徒等は、一しきり春の潮（うしほ）の湧く様に騒いだ。

五分とも経たぬうちに、今度は秋野がその鐘索（しょうさく）を引いて、先づ控所へ出て行つた。と、健は校長の前へ行つて、半紙を八つに畳んだ一枚の紙を無造作に出した。

『これ書いて来ました。何卒（どうぞ）宜しく願ひます。』

笑ふ時目尻の皺の深くなる、口髯の下向いた、寒さうな、人の好さ相な顔をした安藤は、臆病らしい眼付をして其紙と健の顔を見比（みくら）べた。前夜訪ねて来て書式

を聞いて行つたのだから、展(あ)けて見なくても解職願な事は解つてゐる。

そして、妙に喉に絡(から)まつた声で言つた。

『然うでごあんすか。』

『は。何卒(どうぞ)。』

綴ぢ了へた許りの新しい出席簿を持つて、立ち上つた孝子は、チラリと其畳んだ紙を見た。そして、健が四月に罷めると言ふのは予々(かねがね)聞いてゐた為であらう、それが若しや解職願ではあるまいかと思はれた。

『何と申して可いか……ナンですけれども、お決めになつてあるのだば為方(しかた)がない訳でごあんす。』

『何卒宜しく、お取り計ひを願ひます。』
と言つて健は、軽く会釈して、職員室を出て了つた。
その後から孝子も出た。
控所には、級が新しくなつて列(なら)ぶべき場所の解らなくなつた生徒が、ワヤワヤと騒いでゐた。秋野は其間を縫つて歩いて、
『先(せん)の場所(ところ)へ列ぶのだ、先の場所へ。』
と叫んでゐるが、生徒等は、自分達が皆及第して上の級に進んだのに、今迄の場所に列ぶのが不見識な様にでも思はれるかして、仲々言ふことを聞かない。と見た健は、号令壇を兼ねてゐる階段の上に突立つて、

『何を騒いでゐる。』

と呶鳴つた。耳を聾する許りの騒擾(さわぎ)が、夕立の霽(は)れ上る様にサツと収つて、三百近い男女の瞳はその顔に萃(あつ)まつた。

『一同(みんな)今迄の場所(ところ)に今迄の通り列べ。』

ゾロ〱と足音が乱れて、それが鎮(しづま)ると、各級は皆規則正しい二列縦隊を作つてゐた。闃乎(ひつそり)として話一つする者がない。新入生の父兄は、不思議相にしてそれを見てゐた。

渠は緩(ゆつく)りした歩調で階段を降りて、秋野と共に各級をその新しい場所に導いた。孝子は新入生を集めて

列を作らしてゐた。

　校長が出て来て壇の上に立つた。密々（ひそひそ）と話声が起りかけた。健は背後（うしろ）の方から一つ咳払ひをした。話声はそれで再（また）鎮つた。

『えゝ、今日から明治四十年度の新しい学年が始まります……』

と、校長は両手を邪魔相に前で揉みながら、低い、怖々（おづおづ）した様な声で語り出した。二分も経つか経たぬに、

『三年一万九百日。』

と高等科の生徒の一人が、妙な声色を使つて言つた。

『叱（し）ツ。』

と秋野が制した。潜笑(しのびわら)ひの声は漣(さゞなみ)の様に伝はつた。そして新しい密語(ひそめき)が其に交(まじ)つた。

それは恰度今の並木孝子の前の女教師が他村へ転任した時——去年の十月であつた。——安藤は告別の辞(ことば)の中で「三年一万九百日」と誤つて言つた。その女教師は三年の間この学校にゐたつたのだ。それ以来年長(としかさ)の生徒は何時もこの事を言つては、校長を軽蔑する種にしてゐる。恰度この時、健もその事を思出してゐたので、も少しで渠も笑ひを洩らすところであつた。

密語(ひそめき)の声は漸々(だんだん)高まつた。中には声に出して何やら笑ふのもある。と、孝子は草履の音を忍ばせて健の

傍（かたはら）に寄つて来た。
『先生が前の方へ被入（いらつしや）ると宜うございます。』
『然うですね。』と渠も囁いた。
そして静かに前の方へ出て、階段の最も低い段の端の方へ立つた。場内はまた水を打つた様に※乎（ひつそり）［＃「門＜嗅のつくり」、323-上-10］とした。
不図渠は、諸有（あらゆる）生徒の目が、諄々（くどくど）と何やら話し続けてゐる校長を見てゐるのでなく、渠自身に注がれてゐるのに気が付いた。例（いつも）の事ながら、何となき満足が渠の情（こころ）を唆かした。そして、幽かに唇（くち）を歪めて微笑（ほほゑ）んで見た。其処にも此処にも、幽かに微笑んだ生徒の

顔が見えた。

校長の話の済んで了ふまでも、渠は其処から動かなかつた。

それから生徒は、痩せた体の何処から出るかと許り高い渠の号令で、各々（おのおの）その新しい教室に導かれた。

四人の職員が再び職員室に顔を合せたのは、もう十一時に間のない頃であつた。学年の初めは諸帳簿の綴（とぢか）変へやら、前年度の調物の残りやらで、雑務が仲々多い。四人はこれといふ話もなく、十二時が打つまでも孜々（せつせ）とそれを行（や）つてゐた。

『安藤先生。』

と孝子は呼んだ。

『ハ。』

『今日の新入生は合計（みんな）で四十八名でございます。その内、七名は去年の学齢で、一昨年（をととし）ンのが三名ございますから、今年の学齢で来たのは三十八名しかありません。』

『然うでごあんすか。総体で何名でごあんしたらう？』

『四十八名でございます。』

『否（いいえ）、本年度の学齢児童数は？』

『それは七十二名といふ通知でございます、役場から

の。でございますから、今日だけの就学歩合では六十六、六六七にしか成りません。』

『少いな。』と校長は首を傾げた。

『何有(なあに)、毎年今日はそれ位なもんでごあんす。』と、十年もこの学校にゐる土地者(ところもの)の秋野が喙(くち)を容れた。『授業の始まる日になれば、また二十人位ア来あんすでア。』

『少いなア。』と、校長はまた同じ事を言ふ。

『奈何(どう)です。』と健は言つた。『今日来なかつたのへ、明日(あす)明後日(あさつて)の中に役場から又督促さして見ては？』

『何有(なあに)、明々後日(やのあさつて)になれば、二十人は屹度来あんすで

ア。保険付だ。』と、秋野は鉛筆を削つてゐる。
『二十人来るにしても、三十八名に二十……残部十四名の不就学児童があるぢやありませんか？』
『督促しても、来るのは来るし、来ないのは来なごあんすぜ。』
『ハヽヽ。』と健は訳もなく笑つた。『可いぢやありませんか、私達が草鞋を穿いて歩くんぢやなし、役場の小使を歩かせるのですもの。』
『来ないのは来ないでせうなア。』と、校長は独語の様に意味のないことを言つて、卓の上の手焙の火を、煙管で突いてゐる。

『一学年は並木さんの受持だが、御意見は奈何です？』
然う言ふ健の顔に、孝子は一寸薄目を与れて、
『それア私の方は……』
と言出した時、入口の障子がガラリと開いて、浅黄がゝつた縞の古袷に、羽織も着ず、足袋も穿かぬ小造りの男が、セカ〳〵と入つて来た。
『やあ、誰かと思つたば東川さんか。』と、秋野は言つた。
『其麽に喫驚する事はねえさ。』
然う言ひながら東川は、型の古い黒の中折を書類入の戸棚の上に載せて、

『やあお急しい様でごあんすな。好いお天気で。』と、一同に挨拶した。そして、手づから椅子を引寄せて、遠慮もなく腰を掛け、校長や秋野と二言三言話してゐたが、何やら気の急ぐ態度であつた。その横顔を健は眤と凝視めてゐた。齢は三十四五であるが、頭の頂辺が大分円く禿げてゐて、左眼が潰れた眼の上に度の強い近眼鏡をかけてゐる。小形の鼻が尖つて、見るから一癖あり相な、抜目のない顔立である。

『時に、』と、東川は話の断目を待構へてゐた様に、椅子を健の卓に向けた。『千早先生。』

『何です？』

『実は其用で態々(わざわざ)来たのだがなす、先生、もう出したすか？　未(ま)だすか？』

『何をです？』

『何をツて。其麼(そんな)に白ばくれなくても可(よ)ごあんすべ。出したすか？　出さねえすか？』

『だから何をさ？』

『解らない人だなア。辞表をす。』

『あゝ、その事(こつ)ですか。』

『出したすか？　出さねえすか？』

『何故(なぜ)？』

『何故ツて。用があるから訊くのす。』

よくツケ〳〵と人を圧迫（おしつ）ける様な物言（ものいひ）をする癖があつて、多少の学識もあり、村で健が友人（ともだち）扱ひをするのは此男の外に無かつた。若い時は青雲の夢を見たもので、機会（をり）あらば宰相の位にも上らうといふ野心家であつたが、財産のなくなると共に徒（いたづ）らに村の物笑ひになつた。今では村会議員に学務委員を兼ねてゐる。

『出しましたよ。』と、健は平然（けろり）として答へた。

『真箇（ほんと）すか？』と東川は力を入れる。

『ハヽヽ。』

『だハンテ若い人は困る。人が甚麼（どんな）に心配してるかも知らないで、気ばかり早くてさ。』

『それ〱、煙草の火が膝に落ちた。』
『これだ！』と、呆れた様な顔をしながら、それでも急いで吸殻を膝から払ひ落して、『先生、出したつても今日の事だがら、まだ校長の手許にあるベアハンテ、今の間(うち)に戻してござれ。』
『何故(なぜ)？』
『いやサ、詳しく話さねえば解らねえが……実はなす、』
と穏かな調子になつて、『今日何も知らねえで役場さ来てみたのす。そすると種市助役が、一寸別室、て呼ぶだハンテ、何だど思つて行つて見だば先生の一件さ。

昨日逢つた時、明日辞表を出すつてゐだつけが、何しろ村教育も漸々(やうやう)発展の緒に就いた許りの時だのに、千早先生に罷められては誠に困る。それがと言つて今は村長も留守で、正式に留任勧告をするにも都合が悪い。何れ(いづ)二三日中には村長も帰るし、七日には村会も開かれるのだから、兎も角もそれまでは是非待つて貰ひたいと言ふのでなす、それで畢竟(つまり)は種市助役の代理になつて、今俺ア飛んで来たどころす。解つたすか？』

『解るには解つたが、……奈何(どう)も御苦労でした。』

『御苦労も糞も無え(ね)が、なす、先生、然う言ふ訳だハンテ、何卒(どうか)一先(ひとまづ)戻して貰つてござれ。』

戻して貰へ、といふ、その「貰へ」といふ語（ことば）が驕持心（ほこり）の強い健の耳に鋭く響いた。そして、適確（きつぱり）した調子で言つた。

『出来ません、其麼事は。』

『それだハンテ困る。』

『御好意は充分有難く思ひますけれど、為方がありません、出して了つた後ですから。』

秋野も校長も孝子も、鳴（なり）を潜めて二人の話を聞いてゐた。

『出したと言つたところです、それが未だ学校の中にあるのだば、謂はゞ未だ内輪だけの事でアねえすか？』

『東川さん、折角の御勧告は感謝しますけれど、貴方は私の気性を御存知の筈です。私は一旦出して了つたのは、奈何(どう)あつても、譬へそれが自分に不利益であつても取戻すことは厭です。内輪だらうが外輪だらうが、私は其麼(そんな)事は考へません。』

然う言つた健の顔は、もう例(いつも)の平然(けろり)とした態(さま)に帰つてゐて、此上いくら言つたとて動きさうにない。言ひ出しては後へ退(ひ)かぬ健の気性は、東川もよく知つてゐた。

東川は突然(いきなり)椅子を捻向けた。

『安藤先生。』

その声は、今にも喰つて掛るかと許り烈しかつた。
嚇(おど)すナ、と健は思つた。
『ハ？』と言つて、安藤は目の遣場(やりば)に困る程周章(まごつ)いた。
『先生ア真箇(ほんたう)に千早先生の辞表を受取つたすか？』
『ハ。……いや、それでごあんすでは。今も申上げようかと思ひあんしたども、お話中に容喙(くちだし)するのも悪いと思つて、黙つてあんしたが、先刻(さつき)その、号鐘(かね)が鳴つて今始業式が始まるといふ時、お出しになりあんしてなす。ハ、これでごあんす。』と、硯箱の下から其解職願を出して、『何れ後刻(あと)で緩(ゆつく)りお話しようと思つてあんしたつたども、今迄その暇がなくて一寸此処にお預

りして置いた訳でごあんす。何しろ思懸けないことでごあんしてなす。ハ。』

「その書式を教へたのは誰だ？」と健は心の中で嘲笑（あざわら）つた。

『然（さ）うすか、解職願お出しエんしたのすか？　俺ア少しも知らなごあんしたオなす。』と、秋野は初めて知つたと言ふ態（ふう）に言つた。『千早先生も又、甚麽（どんな）御事情だかも知れねえども、今急にお罷めアねえくとも宜うごあんすベアすか？』

『安藤先生、』と東川は呼んだ。『そせば先生も、その辞表を一旦お戻しやる積りだつたのだなす？』

『ハ、然うでごあんす。何れ後刻でお話しようと思つて、受取つた訳でアごあんせん、一寸お預りして置いただけでごあんす。』

『お戻しやれ、そだら。』と、東川は命令する様な調子で言つた。『お戻しやれ、お聞きやつた様な訳で、今それを出されでア困りあんすでば。』

『ハ。奈何せ私も然う思つてだのでごあんすアハンテ、お戻しすあんす。』と、顔を曇らして言つて、頬を凹ませてヂウ〱する煙管を強く吸つた。戻すも具合悪く、戻さぬも具合悪いといつた態度である。

健は横を向いて、煙草の煙をフウと長く吹いた。

『お戻しやれ、俺ア学務委員の一人（いちにん）として勧告しあんす。』

安藤は思切り悪く椅子を離れて、健の前に立つた。

『千早さん、先刻（さつき）は急（いそが）しい時で……』と諄々（くどくど）弁疏（いひわけ）を言つて、『今お聞き申して居れば、役場の方にも種々（いろいろ）御事情がある様でごあんすゝ、一寸お預りしただけでごあんすから、兎に角これはお返し致しあんす。』

然う言つて、解職願を健の前に出した。その手は顫へてゐた。

健は待つてましたと言はぬ許りに急に難しい顔をして、霎時（しばし）、昵（じつ）と校長の揉手（もみで）をしてゐるその手を見てゐ

た。そして言つた。
『それでは、直接郡役所へ送つてやつても宜うございますか？』
『これはしたり！』
『先生。』『先生。』と、秋野と東川が同時に言つた。そして東川は続けた。
『然うは言ふもんでアない。今日は俺の顔を立てゝ呉れても可(い)いでアねえすか？』
『ですけれど……それア安藤先生の方で、お考へ次第進達するのを延さうと延すまいと、それは私には奈何(どう)も出来ない事ですけれど、私の方では前々から決めて

ゐた事でもあり、且つ、何が何でも一旦出したのは、取るのは厭ですよ。それも私一人の為めに村教育が奈何(どう)の恷(か)うのと言ふのではなし、却(かへつ)てお邪魔をして居る様な訳ですからね。』と言つて、些(ちよつ)と校長に流眄(よこめ)を与(く)れた。

『マ、マ、然うは言ふもんでア無えでばサ。前々から決めておいた事は決めて置いた事として、茲(ここ)はマア村の頼みを訊いて呉れても可いでアねえすか？　それも唯、一週間か其処いら待つて貰ふだけの話だもの。』

『兎に角お返ししあんす。』と言つて、安藤は手持無沙汰に自分の卓(つくゑ)に帰つた。

『安藤先生。』と、東川は再喰(また)つて掛る様に呼んだ。『先生もまた、も少し何とか言方が有りさうなもんでアねえすか？　今の様でア、宛然(まるで)俺に言はれた許りで返す様でアねえすか？　先生には、千早先生が何(ど)れだけこの学校に要のある人だか解らねえすか？』

『ハ？』と、安藤は目を怖々(おづおづ)さして東川を見た。意気地なしの、能力(はたらき)の無い其顔には、あり〱と当惑の色が現れてゐる。

　と、健は、然(さ)うして擦(す)つた揉(も)んだと果しなく諍(あらそ)つてるのが、――校長の困り切つてるのが、何だか面白くなつて来た。そして、ツと立つて、解職願を再(また)校長の

卓に持つて行つた。

『兎に角これは貴方に差上げて置きます。奈何（どう）なさらうと、それは貴方の御権限ですが……』

と言ひながら、傍（はた）から留めた秋野の言葉は聞かぬ振をして、自分の席に帰つて来た。

『困りあんしたなア。』と、校長は両手で頭を押へた。

眇目（めつかち）の東川も、意地悪い興味を覚えた様な顔をして、黙つてそれを眺めた。秋野は煙管の雁首（がんくび）を見ながら煙草を喫（の）んでゐる。

と、今迄何も言はずに、四人の顔を見巡（みまは）してゐた孝子は、思切つた様に立上つた。

『出過ぎた様でございますけれども……アノ、それは私がお預り致しませう。……千早先生も一旦お出しになつたのですから、お厭でせうし、それでは安藤先生もお困りでせうし、お役場には又、御事情がお有りなのですから……』と、心持息を逸(はづ)ませて、呆気(あつけ)にとられてゐる四人の顔を急(いそが)しく見巡した。そして、膨(むつち)りと肥つた手で静かにその解職願を校長の卓から取り上げた。

『お預りしても宜敷(よろし)うございませうか？　出過ぎた様でございますけれど。』

『ハ？　ハ。それア何でごあんす……』と言つて、安

藤は密(そつ)と秋野の顔色を覗つた。秋野は黙つて煙管を咬(くは)へてゐる。

月給から言へば、秋野は孝子の上である。然し資格から言へば、同じ正教員でも一人は検定試験上りで、一人は女ながらも師範出だから、孝子は校長の次(つぎ)席なのだ。

秋野が預るとすると、男だから、且(か)つは土地者(ところもの)だけに種々(いろいろ)な関係があつて、屹度(きつと)何かの反響(さしひびき)が起る。孝子はそれも考へたのだ。そして、

『私の様な無能者(やくにたたず)がお預りしてゐると、一番安全でございます。ホヽヽ。』

と、取ってつけた様に笑ひながら、校長の返事も待たず、その八つ折りの紙を袴の間に挾んで、自分の席に復した。その顔はポウツと赧らんでゐた。

常にない其行動を、健は目を円くして眺めた。

『成程。』と、その時東川は膝を叩いた。『並木先生は偉い。出来した、出来した、なアる程それが一番だ。』

と言ひながら健の方を向いて、

『千早先生も、それなら可がべす？』

『並木先生。』と健は呼んだ。

『マ、マ。』と東川は手を挙げてそれを制した。『マ、これで可いでば。これで俺の役目も済んだといふもん

だ。ハヽヽ。』
　そして、急に調子を変へて、
『時に、安藤先生。今日の新入学者は何人位ごあんすか？』
『ハ？……えゝと……えゝと、』と、校長は周章(まごつ)いて了つて、無理に思出すといふ様に眉を萃(あつ)めた。『四十八名でごあんす。然(さ)うでごあんしたなす。並木さん？』
『ハ。』
『四十八名すか？　それで例年に比べて多い方すか、少い方すか？』
　話題(はなし)は変つて了つた。

『秋野先生、』

と言ひながら、胡麻塩頭の、少し腰の曲つた小使が入つて来た。

『お家から迎（むけ）えが来たアす。』

『然うか。何用だべな。』と、秋野は小使と一緒に出て行つた。

腕組をして昵（じつ）と考込んでゐた健は、その時ツと立上つた。

『お先に失礼します。』

『然うすか？』と、人々はその顔――屹（きつ）と口を結んだ、額の広い、その顔を見上げた。

『左様なら。』

健は玄関を出た。処々乾きかゝつてゐる赤土の運動場には、今年初めての黄（きいろ）い蝶々が二つ、フワ〳〵と縺（もつ）れて低く舞つてゐる。隅の方には、柵を潜つて来た四五羽の鶏が、コツ〳〵と遊んでゐた。

太い丸太の尖（さき）を円めて二本植ゑた、校門の辺（ところ）へ来ると、何（いづ）れ女生徒の遺失（おと）したものであらう、小さい赤櫛が一つ泥の中に落ちてゐた。健はそれを足駄の歯で動かしてみた。櫛は二つに折れてゐた。

健が一箇年だけで罷（や）めるといふのは、渠が最初、知合の郡視学に会つて、昔自分の学んだ郷里の学校に出

てみたい、と申込んだ時から、その一箇年の在職中も、常々言つてゐた事で、又、渠自身は勿論、渠を知つてゐるだけの人は、誰一人、健を片田舎の小学教師などで埋もれて了ふ男とは思つてゐなかつた。小(ちひさ)い時分から覇気の壮(さか)んな、才気に溢れた、一時は東京に出て、まだ二十(はたち)にも足らぬ齢で著書の一つも出した渠——その頃数少き年少詩人の一人に、千早林鳥(ちはやりんてう)の名のあつた事は、今でも記憶してゐる人も有らう。——が、侘しい百姓村の単調な其日々々を、朝から晩まで、熱心に、又楽し相に、育ち卑しき洟垂(はなたら)しの児女等(こどもら)を対手に送つてゐるのは、何も知らぬ村の老女達(としよりたち)の目にさへ、不思

議にも詰らなくも見えてゐた。

何れ何事かやり出すだらう！　それは、その一箇年の間の、四周の人の渠に対する思惑であつた。

加之、年老つた両親と、若い妻と、妹と、生れた許りの女児と、それに渠を合せて六人の家族は、いかに生活費の費らぬ片田舎とは言へ、又、倹約家の母がいかに倹つてみても、唯八円の月給では到底喰つて行けなかつた。女三人の手で裁縫物など引受けて遣つてもゐたが、それとても狭い村だから、月に一円五十銭の収入は覚束ない。

そして、もう六十に手の達いた父の乗雲は、家の

惨状（みじめさ）を見るに見かねて、それかと言つて何一つ家計の補助（たし）になる様な事も出来ず、若い時は雲水もして歩いた僧侶上りの、思切りよく飄然（ふらり）と家出をして了つて、この頃漸く居処が確（たしか）まつた様な状態（ありさま）であつた。

健でないにしたところが、必ず、何かもつと収入（みいり）の多い職業を見付けねばならなかつたのだ。

『健や、四月になつたら学校は罷めて、何処さか行ぐべアがな？』

と、渠の母親——背中の方が頭よりも高い程腰の曲つた、極く小柄な渠の母親は、時々心配相に恁（か）う言つた。

『あゝ、行くさ。』と、其度（そのたび）渠は恁麼（こんな）返事をしてゐた。

『何処さ？』

『東京。』

東京へ行く！　行つて奈何(どう)する？　渠は以前の経験で、多少は其名を成してゐても、詩では到底生活されぬ事を知つてゐた。且(か)つは又、此頃の健には些(ちつ)とも作詩の興がなかつた。

　小説を書かう、といふ希望は、大分長い間健の胸にあつた。初めて書いてみたのは、去年の夏、もう暑中休暇に間のない頃であつた。『面影』といふのがそれで、昼は学校に出ながら、四日続け様に徹夜して百四十何枚を書了(かきを)へると、渠はそれを東京の知人に送つた。十

二三日経つて、原稿はその儘帰つて来た。また別の人に送つて、また帰つて来た。三度目に送る時は、四銭の送料はあつたけれども、添へてやる手紙の郵税が無かつた。健は、何十通の古手紙を出してみて、漸々（やうやう）一枚、消印（スタンプ）の逸（はづ）れてゐる郵券を見つけ出した。そしてそれを貼つて送つた。或（ある）雨の降る日であつた。妻の敏子は、到頭金にならなかつた原稿の、包紙の雨に濡れたのを持つて、渠の居間にしてゐる穢（むさくる）しい二階に上つて来た。

『また帰つて来たのか？　アハヽヽヽ。』

と渠は笑つた。そして、その儘本箱の中に投げ込んで、

二度と出して見ようともしなかつた。

何時(いつ)の間にか、渠は自信といふものを失つてゐた。然しそれは、渠自身も、四周の人も気が付かなかつた。

そして、前夜、短い手紙でも書く様に、何気なくスラスラと解職願を書きながらも、学校を罷(や)めて奈何(どう)するといふ決心はなかつたのだ。

健は、例(いつも)の様に亭乎(すらり)とした体を少し反身(そりみ)に、確乎(しつかり)した歩調(あしどり)で歩いて、行き合ふ児女等(こどもら)の会釈に微笑みながらも、始終思慮(かんがへ)深い眼付をして、

「罷めても食へぬし、罷めなくても食へぬ……。」

と、その事許(ばか)り思つてゐた。

家（うち）へ入ると、通し庭の壁側（かべぎは）に据ゑた小形の竈（へつつひ）の前に小さく蹲（しやが）んで、干菜（ほしな）でも煮るらしく、鍋の下を焚いてゐた母親が、

『帰つたか。お腹（なか）が減つたつたべアな？』

と、強（し）ひて作つた様な笑顔を見せた。今が今まで我家の将来（ゆくすゑ）でも考へて、胸が塞（つま）つてゐたのであらう。

縞目も見えぬ洗晒（あらひざら）しの双子（ふたこ）の筒袖の、袖口の擦切（すりき）れたのを着てゐて、白髪交りの頭に冠つた浅黄の手拭の上には、白く灰がかゝつてゐた。

『然うでもない。』

と言つて、渠は足駄を脱いだ。上框（あがりがまち）には妻の敏子が、

垢着いた木綿物の上に女児（こども）を負（おぶ）つて、顔にかゝるほつれ毛を気にしながら、ランプの火屋（ほや）を研（みが）いてゐた。

『今夜は客があるぞ、屹度（きつと）。』

『誰方（どなた）？』

それには答へないで、

『あゝ、今日は急（いそが）しかつた。』

と言ひながら、健は勢ひよくドン〳〵梯子（はしご）を上つて行つた。

（その一、終）

（予が今までに書いたものは、自分でも忘れたい、

人にも忘れて貰ひたい、そして、予は今、予にとつての新らしい覚悟を以てこの長編を書き出してみた。他日になつたら、また、この作をも忘れたく、忘れて貰ひたくなる時があるかも知れぬ。——啄木）

〔「スバル」明治四十二年二月号〕

底本：「石川啄木全集　第三巻　小説」筑摩書房
　　１９７８（昭和53）年10月25日初版第1刷発行
　　１９９３（平成５年）年５月20日初版第７刷発行
底本の親本：「スバル　第二号」
　　１９０９（明治42）年２月１日発行
初出：「スバル　第二号」
　　１９０９（明治42）年２月１日発行
入力：Nana ohbe
校正：川山隆
２００８年10月18日作成
青空文庫ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。